

韻鏡管見

龜田 次郎

今回、本館で韻鏡諸本展觀會が開催されるについて、自分の所藏本の提出を促されて出陳しましたが、更に、此「韻鏡」といふものについて、極めて平易に、所謂今日の流行語でいへば、大衆向に講演せよとの事でありました。それで、今日、此席で、其希望方針の下に、お話する次第であります。此所にお出でになつて居られる方々の中には、已に御自身で、専門的知識を有たれて居る方も、おありでありませうが、何分當事者の御意嚮が斯様な譯ですから、不充分で物足らぬ所があるでせうが、それは御容捨を願はねばならぬとおもふのであります。

「韻鏡」といふ書物は、夙に其出來た支那では逸書に屬して傳はつてゐないので、獨、我日本に遺存してゐるのです。而も古來、難解の書とせられて、學者が研究に大に苦しんで、韻鏡十三年、八衢八年といふ語さへある位でした。本居春庭の「詞の八衢」は、今日では中等學校の教科書には「八衢」の内容の、動詞の活用を、極めて簡明に記述してあるので、數時間で教授が明瞭に出來る様になつてゐて、最早、八年といふ様な長い年月は要しない事となりましたが、之に反して、「韻鏡」の方は未だ中々容易に了解出來ない様であります。此は古來難解書とせられて、十三年も掛るといふ位にいはいはれ、果ては「韻鏡」は理論では中々了解するのに骨が折れて大に苦心を要する。「韻鏡」は到底學理ではゆかぬ、寧ろ頓悟のものであるとさへ唱へられてゐるのです。「韻鏡」は決して古來から唱へられてゐる様なそんな難解

の書物では無いのであつて、學者が其研究の方法を誤つて次第に世を経るにつれ、愈々其誤解を重ねた結果、斯様な事になつたのであります。それで自分が多年此「韻鏡」について研究致しました所から、古來研究の徑路や、研究者の迷路に這入つた點や、其他種々の事項を順序を立て、お話して、「韻鏡」其物の實質について述べ、皆様の御參考にしたいとおもふのであります。尙、繰返して申して置きます事は、私の講演は、元來が平易通俗的の方針であるから、極めて大綱の點のみを述べるので、詳細な事項に關しては、之を全然省略して避けるのであります。只「韻鏡」の本質本體は何かといふ事がわかる丈を述べるのです。それで尙進んで微細な點については、皆様が更に各自御研究になられん事を切に望んでやまないであります。

最初に申しました様に、「韻鏡」は其本國の支那では、夙に散逸して仕舞つてゐて、獨、我日本に儼存してゐたのでありますから、従前から其研究も亦彼邦には全然無く、吾邦ばかりにあつたのです。近年支那では、所謂小學の學問が勃興して來たので、此「韻鏡」の影印本や覆刻本が刊行され、従うて「韻鏡」の研究も起つて來たのです。然しこの傾向趨勢は極最近といつてよいのです。それで此「韻鏡」の研究の徑路をお話するのに、自然我日本ばかりの話になるのは致方がないのです。此事は特に御承知を願つておかねばならないのです。

「韻鏡」は支那で何時頃出來たかは詳かに知れないが、唐宋であらうといはれてゐるのです。全篇四十三圖あつて、每圖二十三行(即、七音)十六段(即、四聲で每聲四段)に分けて、これに漢字を配置し、上下左右相照し合せて音韻を正し得るから、音韻の明鏡といふので、其書名が出來たのであります。此「韻鏡」は宋代に張麟之といふ人が、友人から此一篇を獲て、資益がある所から、紹興三十一年(唐亡後二百五十四年吾朝平治亂後二年)に印行し、三十七年後の慶元

三年(吾朝源賴朝薨前二年)に再刊し、更に又七年後の嘉泰三年(吾朝源實朝將軍に任命の年)に序例を撰述して添加へて三刊したといふことが、其序文に見えてゐるのです。又此「韻鏡」は、宋の初には避諱の爲に「韻鑑」と改稱されたと、此序文に見えて居るのです。宋代に出来たものなら斯る名をつけないだらうから、此點から唐代の作である事が知られるのです。此第三板本が、支那から傳來して奈良に存在してゐたのです。此三板本が後年に見出されたのです。其發見の顛末が種々の「韻鏡」關係書に見えてゐます。今拙藏の「韻鏡看拔集」(室町初期感)といふ鈔本の卷首の文を引用しますと、

南都轉經院律師此韻鏡久雖所持不能讀之間上總前司公氏此序屬令點之處非悉曇師難叶終返之爰小河嫡弟明了聖人(信範上人事也)有之悉曇奧義究日域無双人屬之初加點者也自爾以來切韻妙義有釋門相傳更凡儒無之因茲序云胡僧(天竺人也)有此妙義儒者未聞之矣又之凡儒不得其傳

とあるのです。然るに後年世に公にされた河野通清の「韻鑑古義標註」(享保十一年刊)上卷の最末には、

○韻鑑本朝傳來舊記云皇和人王八十九世龜山院文永之間南都轉經院律師始得韻鏡於唐本文庫茫然不辨知有甚益又同時有明了房信範能達悉曇掛錫於南京極樂院聞此書而即加和點自是韻鑑流行本邦也

とあつて、龜山天皇御宇文永年間の發見の様に記してあるが、後世の學者は皆此說を襲用してゐる様であります。處が此年代については、已に岡本保孝といふ幕末明治初年に居た韻鏡學者は、其著「韻鏡考」に疑つて「此舊記の出典考ふべし」といつてゐますが、自分も亦同感です。それは此文永年年初めて發見したといふ時より以前に、已に「韻鏡」の鈔本があるからです。それは東京帝大の國語研究室に、建長四年二月十二日書寫了明了房と奥書のある「韻鏡」古鈔

本があつたのです。これでもつて知られるのです。處が此古鈔本は、惜しい事に大正十二年九月一日の震災で焼失して仕舞つたので、最早今日では見る事が出来ないのです。然し其奥書や内容の一斑は、大矢透さんの「韻鏡考」といふ名著にも載つてあつて知る事が出来ます。兎にも角にも、鎌倉中期に已に發見されてゐたのは確であります。斯く愈々「韻鏡」が發見されたけれども、前にも申しました如く、誠に難解であつたので、研究に苦んで、或は鈔本を調製したり、或は註釋を作つたりして、大に護身を窺したのであります。今日吾々は多くの古鈔本や註釋書などの遺存してゐるのを見るのであります。古鈔本では、前述の大正震災焼失の明了房信範書寫の建長四年本を初め、玄惠法印の元徳三年正月書寫本、俊慶權律師の嘉吉元年仲春本（醍醐三寶院所藏）、元龜二年本（佐藤仁之助氏所藏）本などがあります。註釋書では至徳四年本の「指微韻鏡略抄」、同年の「韻鏡秘訣」を初めとして、應永年間に出來た「指微韻鏡私抄略」、絶海和尚作と稱せられる「韻鏡略抄」、照珍作の「反音抄」、聖清書寫の「道忠抄」、「韻鏡字相傳口授」があり、其他寶徳元年宗杲書寫の「七種反音」、文明十七年任堯書寫の「五韻反」、永正年間には印融法印の「三四反切私抄」、大永前後には「韻鏡珪瑀集」があり、尙此室町時代のものに、前述の「韻鏡看拔集」もあり、以上の諸本は、皆、何れも韻鏡其物についての註釋でありますが、其註釋も專、韻鏡の序文について述べたものであつて、本圖について論述したものは殆んど無いのです。又此と同時に、悉曇學者が、其研究の上に「韻鏡」を利用する者も出たのであります。佛教中特に眞言宗に於ては、諷誦を重んじて、音聲即妙乘と立てたので、従つて聲明に對する關心も深甚であつた處へ、「韻鏡」といふ書物が發見されて、聲韻上の幾多の術語を供給したので、其悉曇上の講義に「韻鏡」を利用してゐるのです。前に申しました明了房信範の著述の「悉曇私抄」、「調聲要決抄」、「悉曇字記明了房記」にも、又東寺三寶の一人杲實の「悉曇

字記創學抄」にも盛んに「韻鏡」が利用されてゐるのです。これで其一班が推測されるとおもふのであります。

斯の如く、「韻鏡」の鈔本や、註釋書や、また悉曇學に利用などが起つて來て、鎌倉室町時代に及んだのであります。所が自然の傾向として、茲に「韻鏡」の刊行が出來たのです。それは室町時代末期の享祿元年、當時海外貿易の要港であつた和泉國堺港で創刊されたのです。「韻鏡」發見後二百五十年後であります。此創刊は、其跋文に、

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫之訛烏而焉々而馬覽者多困彼此不一泉南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改因命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非敢擴之天下聊備家訓而已於戲今日家書乃天下書也學者思旃

享祿戊子孟冬初一日

正三位行侍從臣清原宣賢

とあります。これで以て其刊行の由來や顛末が明かるのであります。此跋文中の泉南宗仲論師を、普通には「泉南の宗仲論師」と讀んだが、或學者は「宗仲と云ふ人が有るのでは無い、和泉大島郡に南宗寺といふ寺があるが、其頃ハ寺ではなく庵主であつて、其庵主に仲論師といふのが有つたのだ」といふ説を唱へ、此に従うてゐた人もあつたが、近年、堺市の光明院といふ寺中の普門院に宗仲といふ僧侶が居つて、三條西實隆郷が此人に宛てゝ、新板の「韻鏡」一本を懇望された文書が發見されたので、南宗と續けてはならず、宗仲は切つてはならぬ事と定まつた。此普門院の事は、夙に知れてゐて、寶曆七年に出來た「全界詳志」にも、

往年光明院の枝院の普門院主韻鑑年代記の二書印板せし由、其頃西三條實隆卿より來書に其事あり。何れの本なりや未詳云々。

とあるのを、黒川春村の「音韻考證」にも引用してゐるのであります。さて此創刊本の享祿元年板「韻鏡」は自分の知る所では、東京帝大國語研究室と故木村正辭博士とに各一本を藏せられてゐたのだが、研究室本は大正十二年の震災で焼失し、木村本は何處に傳はつたか不明であります。此二本の外に、此享祿板と唱へられるものが所々にあるが、自分の見た所では、何れも後出の寛永十八年板の覆刻本の卷末の刊記を削去したものであります。即寛永十八年板の而も其後刊本といふべきもので、現在では此創刊本は未だ見出され無いのであります。此創刊本は、後三十七年目永祿七年に再刊されたが、多少本文に異同がある様であります。此再刊本は往々世間に遺つてゐますし、又支那の「古逸叢書」の中に收められて出版されてゐます。拙藏本は船橋家即清原家の舊藏本で、「古逸叢書本」や民國十八年の謄寫版本と共に展觀に供へてあります。此再刊本は跋文の次に、

頃間求得宋慶元丁巳張氏所刊之韵本而重校正焉永祿第七歲舍甲子王春壬子

と陰刻してありますから、創刊本との異同ある事が知れるのです。尙詳細に異同を知るには享祿板の覆刻寛永十八年本と永祿板の覆刻「古逸叢書」本とを相互對照されたならば明かるのであります。「韻鏡」を室町時代の末期に享祿、永祿の二板が刊行されてから、江戸時代に及んで續々と出版を重ねられてゐるのであります。即徳川時代になつてから、慶長十三年二月に京都で木活字板が刊行され、次いて元和頃の刊行とおもはれる整板本二種、一は序文有割本、一は其無割本の何れも大型本が出版になり、引續いて寛永五年、同十八年、同二十一年、正保二年、同三年、同四年、慶安元年に二種、明暦二年、萬治三年、寛文二年、同三年、同四年、同十一年、延寶三年、同七年、天和二年、貞享二年、同四年、元祿六年、同九年、同十年、同十二年、同十四年、享保元年、と續々大型本や袖珍本が現はれ、尙此以後に

も表題を改めて諸種の「韻鏡」が刊行されて近く明治末年迄に四十有餘部も世に出されてゐます。従つて其内容も多少改められてゐるのです。只以上の中で寛永十八年本文は、創刊本の儘であつて、他の諸本は皆悉く多少の改竄を施してゐるのです。又一方其註釋書も、同様に續々と世に現はれて來たのであります。江戸時代に出た斯様のもの、最初は菅玄同(鎌田得庵)の「韻學秘典」正續五卷であります。本書は未刊であつて其寫本が今は内閣文庫に藏せられてゐるのです。慶長十一年藤原惺窩が木下長嘯子を訪ねて談、會、九弄反紐法に及んだが、此時、惺窩は紀州和歌山へ行く期日が迫つてゐたので、「九弄圖解」を作つて、長嘯子に示した。其草稿に依つて、門下の玄同が書寫した旨の奥書があります。而して「九弄圖解」は、本書の續集であります。正編四卷は玄同が元和七年の撰といふ事です。四卷の二は、假名反切秘傳、二は名乘反切秘傳、三は諸例秘釋、四は調韻要訣を收めて、夫々説明をして居るが、「韻鏡」の本圖には、毫も觸れずに、何時も深秘に至りては、須らく口授耳授を受くべく、筆墨の能く盡す所に非ずと逃れて居るのです。他の諸點は姑く之を措くも、「韻鏡」を人名反切、名乘判斷を説いてゐるのが、本書が最初で、正編第二卷に見えてゐるのです。これが特に注意すべき所で、「韻鏡」の本旨を誤つて後世に大影響を與へて、今日まで其弊風を傳へてゐる所であります。此書に次いで矢張、京都の住譽といふ人が、寛永三年「韻鏡切要鈔」を著しました。此書は「韻鏡」の序例の解釋で、圖には毫も觸れてゐないのです。然るに翌寛永四年に、同じ京都の自等庵宥朔といふ僧覺が、「韻鏡開卷」六卷を著して、「韻鏡」全部に互つて註釋をしましたが、此書中に「人名の反切には音和を取るを正と爲す」とか、「五行の相生を取る事肝要なり」とかいつて、また人名反切名乘判斷を主張しました。此説は前述の「韻學秘典」所説の「謹考韻鑑歸字例」の如き程のものでも無いのですが、「韻學秘典」が寫本の儘で、世に廣く流布しなかつた爲に、

此「韻鏡開鑑」の方は刊行でもあり、世上に弘布して、後、正保四年、萬治二年と再度迄も重刊されて廣がつた爲めに、後世罪魁とされて非難を受けるので、後年僧文雄の名著「磨光韻鏡餘論」(文化四年刊)にも、

或は人名反切の贅辯を費すなど蕪穢見るに堪へず。其の説を詳にするに、開鑑實に之が祖たり。

と大攻撃を蒙つてゐるのです。尤も反切に依つて字義までも得られ又三十六字母の三十六を四九の積とするといつてゐるのは、前述の「韻鏡切要鈔」にも説いた所であるが、更に一步を進めて、木火金水の五行説にまで説及してゐるなどは、一方からいへば多大の苦心をした所であらうが、此開鑑の示した一路は、爾後一百年間も後の學者の研究を邪道に陥らしめ迷路に彷徨せしめたのみならず、尙延いては、今日までも、此弊風が世に行はれて、「韻鏡」の反切を以て人名反切名乗撰定判斷に使用されるに至つたのです。「韻鏡」の本旨を誤解曲説した源泉は、此開鑑の所説である事を忘れてはならぬのであります。實に慨歎の極であります。

元和偃武以後文藝復古學術の研究頗に旺盛を來し、元祿時代に及んでは、學界の各方面に互つて大に觀るに足るものが頻出したのであります。「韻鏡」の研究も、亦此盛運に連れ、續々世に現はれて來たのは、當然の事であります。

此代表的の人は、僧盛典であります。此人は元祿四年「韻鏡易解」、同十二年「韻鏡字子列位」、正徳四年「新增韻鏡易解大全」、享保十五年「九弄和解」、同十七年「印判秘訣集」、元文二年「倭語連聲集」等を著しました。非常に長命の人であつたので、數多の著述を公にした様です。此外に、此時代の前後に澤山の「韻鏡」關係の著書が頻出してゐるのです。前述の「韻鏡」本文の覆刻や重刊や改刻は勿論、註釋書類も亦續々と多數刊行されたのであります。其主要なものを摘出しますと、以前には承應三年には「道惠鈔」を刊行した「指微韻鏡抄」を初めとして、萬治三年には「韻鏡遮中抄」

(頭書韻鏡、題頭韻鏡)といふ「韻鏡」全部に互つて註釋した最初のものが出てゐます。此書は、後、寛文三年、貞享四年に重刊されて廣く世に流布した様です。此外寛文三年「韻鏡集解初抄」、同八年「韻鏡集解切抄」、同九年井上秋齋の「韻鏡見妖解」、同年小龜益高の「韻鏡秘事抄」、同年太田嘉方の「韻鏡指南鈔」、同十年牧野重長の「韻鏡頓悟集」、同年小龜益高の「韻鏡諺解」、同十一年同人の「韻鏡九井極秘傳指南」、同十三年僧周海の「韻鏡指要」、貞享二年毛利貞齋の「韻鏡秘訣袖中鈔」、同年「韻鏡求源抄」、同三年不孤齋有必の「韻鏡削補便家抄」、同四年湯淺重慶の「韻鏡問答抄及合類韻鏡」などがあり、同時代には元祿十二年岡玉摩の「歸元韻鏡」、同十三年萍風子の「韻鏡詳說大全」、同十五年「韻鏡詳解評林」、同十六年「韻鏡清濁辨音鈔」、寶永年間「韻鏡奧理秘事諸相傳頓悟集」、同二年馬場信武の「韻鏡諸抄大成」、正徳五年毛利貞齋の「韻鏡袖中秘傳抄」、同年辻度昭の「反切例」、享保年間河合元の「韻鏡調」、同五年岡島道高の「韻鏡井蛙抄」、同七年僧尊慧の「韻鏡圖解及同綱目」、などがあります。尙此以後にも澤山刊行されてゐます。又此等刊行の外に尙未刊で寫本の儘で世に傳はつてゐるものも非常に多數ありますが、大體極主要のもので刊行本ばかりを申しましたので此文で見ましても實に隆盛を極めたものです。

前にも申しましたが、菅玄同の「韻學秘典」や自等庵有朔の「韻鏡開鑑」が「韻鏡」を人名撰定に用ひ初めましてから、此風潮が後世まで風靡致しました。一體に佳良な名前をつけて、一生を祝福したいのは、人間の常情であります。最初は單に好奇心から、「韻鏡」に精通した人に自分の名乗や名前の撰定を懇請したのであつたでせうが、之が流行を極めてからは、遂にこれを職業とする専門の撰定家を生ずる様になつたのであります。現に今日でも、斯様な所が成立つてゐて、講義する塾さへある相である。處が斯る「韻鏡」の本義本旨を誤解曲説する弊風は、早晚排斥矯正されねば

ならぬ譯である。然し「韻學秘典」や「韻鏡開蘊」の所説は約一百年の間世に行はれて、兩書以後の「韻鏡」關係の諸本には、大抵此曲説は「韻鏡」の一つの奥義として説述されてゐるのであります。前に述べました多數の註釋書には、大概述べてあるのです。茲に一百年後の享保十一年に、和泉堺浦の沙門叡龍（河野通清漣篇）が、「韻鏡古義標註」元文三年「同補遺」を出板して、茲に從來の曲説を排斥して、世の學者の迷夢を覺醒せしめたのであります。叡龍は本書の序文の中に、

又特有爲通韻鑑者專一反切道俗之名而猥說歸納之是非利害字之少等都違本旨嗚呼此弊風甚日回復

と述べて、「韻鏡」を名乗反切に用ふる過去一世紀の曲説の迷雲を排して、讀書の正音を明すの尊燈たる事を絶叫したのであります。「韻鏡」の創刊も、此覺醒の名著も、共に同じ泉州の堺港の人に依て、而も同じく僧侶に依つて公にされたのは、誠に奇とすべきものでありませんか。此人名を反切して吉凶を占ふ様な事の愚論曲説なる事は、此叡龍の外に、當時の一代の鴻儒荻生徂徠も、其著「なるべし」にもいつてゐます。此は兩人の間に無關係で唱へ出されたのでせうが、東西に同時に、斯る説の出た事は、また不思議であります。さて此叡龍は、後年還俗して漣篇河野通清と改めたのです。後裔は現今堺市に在住されてゐます。此叡龍即、漣篇は、京都高倉にも存在してゐた事もあつて、而も時代も同じであるから、此書名に「古義」と題したのも、當時伊藤仁齋が京都堀川で復古學を唱へてゐたし、自分も亦我より古を作すといふ氣運に乗じて、斯る名稱をつけたのではなからうかとおもふのであります。此人には他に著述も澤山あり、本書末の廣告にも見えてゐます。又此人の「韻鏡」に關する「傳授切紙」といふ類が、多數寫本で諸所に傳

はつてゐます。寛保二年に漣窩先生口義、永田直筆受「改點韻鑑」といふのがありますし、尙、此「古義」の脈を引いたものが多數あります。即、「改點韻鑑」の外に、寛保元年僧乗運の「韻鏡翼」、寶曆十一年池田如翠正傳、田川周芳撰「韻學口訣」などの刊本を初め、前に述べた様に寫本で未刊の儘、世間に傳存してゐるのが大分あります。

漣窩河野通清の唱道によつて名乗反切の弊風が一朝にして止んだとはおもはれませんが、「韻鏡」が讀書に資益あるものだといふ事は、頗る信ぜられる様になつて、後僧文雄の名著「聲光韻鏡」の出るまでは、此「古義」の天下でありましたが、然し其間僅に二十年に過ぎないのであります。

「韻鏡」の研究が、段々と盛んとなつた此享保の頃から、一方には「韻鏡」に依らないで、獨立に音韻を研めるものも出て來たのであります。此風潮は特に注目すべき事で、これがまた後年の「韻鏡」研究に多大の資益影響を醸す事となつたのであります。今次に此獨立派とも稱すべき音韻研究を申しますと、古く慶長十二年に松尾重理が「漢吳讀音法」(寫本)を著してゐますが、これは姑く措いて、享保の頃德積以貫の「九弄十紐口訣」、同二年同人の「反切捷徑指南」、同五年僧天産の「聲音對」、寶曆十二年齋藤齋の「音例」、天明元年寺尾正長の「解經秘藏要略」、同五年同人の「解經秘藏」、安永五年富森一齋の「韻鏡藤氏傳」、文化十四年若槻敬の「音誤」、天保十三年大澤實の「韻鏡發輝」、同十五年同人の「韻鏡發輝易索」などが其主なるものであります。

又他方には元和偃武の頃から支那の小學書の翻刻が續々と行はれ、又此等小學書の箋註書も後年に澤山刊行された上に、清朝勅撰の「康熙字典」が享保年間に傳來し、安永初年に翻刻されて世に弘まり、此等の刊行が、また大に「韻鏡」は勿論、我邦に於ける支那音韻學の發達進歩に偉大な影響を寄與する所があつたのは、忘れてはならぬ事であります。

我邦「韻鏡」研究に劃期的の名著を公にしたのは、僧文雄であります。此人は延享元年に「磨光韻鏡」を刊行して、茲に我「韻鏡」學に一大時期を劃したのであります。本書の緒言の首に、

韻鏡自_レ入_ニ于_二割_一剛氏門_ニ二百有餘載_一茲_ニ世_ニ未_ニ見_ニ真面目_一昔者宗仲_ニ龜魚_一之餘出_ニ乎_一臆裁_ニ焉爾_一來諸家增損者不下_ニ數十本_一要弗_レ知_ニ開閉_一之有_ニ因_レ愈訂愈悞_一攷_ニ之_一願_ニ篇孫韻_一之_レ韻切_ニ則率不_レ律_ニ雖_ニ篇韻原無_ニ等第_一之可_レ見_ニ校_ニ之_一韓韻劉圖_ニ則如_レ視_ニ諸掌_一乎_ニ遂_ニ校_ニ成_ニ一本_一於_ニ是_ニ可_レ謂_ニ韻鏡_一復_ニ原_ニ矣

と絶叫してゐるのであります。享祿元年韻鏡創刊後二百十六年のことであります。本書は四十四年後天明七年に、再刊され、更にまた七十一年後安政四年に、三浦道齋に校正されて出版され、後世大に流布したもので、「韻鏡」といへば爾後皆本書を基準としたものであります。此人は引續いて寛延元年「古今括韻開合圖」、同三年「九弄辨」、寶曆二年「三音正謬」、同四年「經史莊嶽音」、「字彙莊嶽音」、「和字大觀抄」、安永二年「韻鏡指要錄」、「韻切伐柯篇」、同九年「正字韻鏡」、「韻鏡字庫」(以上四書を後篇といふ)文化四年「磨光韻鏡餘論」(後篇及本書及後刊行)などの著述があります。其最偉大なる卓見の第一は、後篇「指要錄」の卷首韻鏡大旨の最初に、

韻鏡の書は本反切の圖には非ず、文字の音韻を正すの鏡なり。

と唱破絶叫したので存するのであります。次に第二の卓見は、「韻鏡」それ自體に於て求むる所の音を與へるのであるから、「韻鏡」は切韻の圖では無いと斷じ、從來張氏序例を解説するに汲々としてゐたのを排して、張氏自身も「韻鏡」の本旨を誤解したのであると看破した點で、文雄自身は之を證據立てる爲に、「切韻指掌圖」や「切韻指南」には現に切韻の二字が冠らされて居るが、「韻鏡」には其様の名稱が無いと述べて居ます。第三の卓見は、文雄は「韻鏡」に依つて

當時種々に傳へられた支那音の正否を判定する標準とした事であります。此外に尙多くの卓見もありますが、一々述べないで、只其極主要なものを述べておきます。然し又一方には、多少の缺點もあるのです。即慢に音圖の文字を増加したり、勝手に開合を變改したりしてゐる所などは、全く無稽な處方であるとおもふのです。それで後世の學者が之を非難攻撃するのです。縱、多少の缺陷があるにしても、此「磨光韻鏡」は前、後、餘の三篇は勿論、他の諸著も皆何れも一大名著たるを失はぬのであります。後世の「韻鏡」諸本は、皆腕を此書に採つたといつてよい位です。今其主要な系統のものをいへば、本圖丈では寶曆頃の「卷懷韻鏡」があり、全篇のものでは寶曆七年僧了圓義の「韻學發蒙」、天明元年僧龍音の「韻鏡經緯」、寛政六年近藤篤の「韻學奎蹄」、天保五年三浦道齋の「韻學楷梯」等の刊本があり、寫本では多數の諸本があります。鶴峰成申の韻鏡關係書も皆此系統で、奥書には韻學僧京師三條了運寺無相文雄上人第七傳兼本居學鶴峰成申などと記したのがあります。又他方反對の側のものでは、寛政十一年泰山霧隱の「音韻斷」の刊本の外に寫本類で大分あります。殊に幕末の黒川春村門人白井寛蔭は、其師春村の「音韻考證」附説の「韻鏡考補」に、

文雄黠才に伐り、慢に音圖の文字を増加し、韻鏡は貫通の律を以て漢吳兩音の規則を正す書なる事を辨へず、常呼に泥み、漢、吳、直、拗、古音、轉音、略音等を混淆し、音註を施したれば、貫通の律なきが如し。猶後篇等十餘卷あり。凡て誣説の甚しきものなり。

と痛罵してゐますが、此は其長所を没して短所のみを攻撃したのでせうとおもはれるのです。文雄の話は大略以上の通でありますが、斯る大家が突然に出現した様におもはれるでせうが、決してそんな譯では無いのです。物事には原因と結果とがあるもので、決して突飛に現出するものではありません。文雄の如き大家の出現にも所謂因果關係とも

いふべき事情状況があつたのであります。今其事をお話しておかうとおもひます。

前にも申しました様に、支那から續々と小學書が渡來し、又我邦では其等の書籍の翻譯が隆んに行はれ、其等の書物の箋註も澤山出來ました。加之、學術の研究が勃興旺盛となり、學者殊に支那學即漢學の方面の人々が、自然の成行として、支那の音韻を研鑽する様になつたのです。此文雄の時代には、特に此支那音韻研究が大に行はれて居た世でしたのです。今其大略をお話し致しませう。

一世の鴻儒荻生徂徠は、此時代に於て天下に覇を有つてゐて、其勢力は大變なものであつたのです。此天下の鴻儒徂徠は、自分の塾で、支那語の研究を初め、正徳元年十月に譯社を設け、當時の有名な支那語學者岡島冠山を聘して講習會を開いた。此譯社約といふ規約が、「徂徠文集」六にも見えてゐます。徂徠は、此時多少學習したでせうが、餘り支那語は出來無かつた様で其事は「授業編」にも見えてゐます。其著述に「韻概」、「同別記」があつて、寫本で傳はつてをり、尙支那語の外に、滿文も研究した様で、「滿文考」といふ著書もあります。これは寫本で神宮文庫にも所藏されてゐるのです。此徂徠門に、太宰春臺が居て、當時在塾中で此支那語の講習を受けた一人で、同門には矢張冠山に學んで音韻及唐音に通じた木下蘭皋があります。「磨光韻鏡」の著者僧文雄は太宰春臺の門に入り、支那語即唐音を習つたのであります。文雄と同門に關口黃山といふ唐音の象胥家(譯官)があります。斯様な關係からして、文雄の支那音韻の素養が出來て、後日種々の名著書を撰述する事が出來たのであります。これで文雄の學問の淵源來由がわかるとおもひます。

徂徠が東方江戸で覇を唱へてゐたに對立して、西方京都で勢力を張つてゐた伊藤仁齋の古義堂の塾でも、「音韻學」

の研究は行はれたのであります。東都徂徠の社中で、支那語の學習があつたに對して、仁齋の塾では、朝鮮語の研究があつたのであります。仁齋の長子東涯には、其小學書の著述の外に、朝鮮語の研究もあつて「韓語考」の著もあつて、今日寫本で傳はつてゐます。徂徠の「滿文考」と相對して面白い現象だとおもふのです。徂徠派の流を汲んだ僧文雄が、其名著「磨光韻鏡」や「三音正譌」に、漢吳唐三音を以て説明してゐるが、此唐音は杭州音だといふ。又此人は朝鮮語も知つてゐたといふにも拘らず、毫も此朝鮮語を著述の中に入れてゐないのは何故であるか、不思議でならないのであります。或は當時學問の關係からか、或は同じ京都在住で程近い所に居つたので、此等の事情からであらうか、此點は深く調べて見たいとおもふのです。

徂徠や東涯や春臺の外に、後年には漢學者に小學書の著作が多く出たが、直接音韻方面のもので、主要有名なものを二三挙げますと、皆川淇園の「補正韻鑑」(寫本)、中井履軒の「諸韻瑚璉」、「履軒古韻」(崇文叢書所收)、山梨稻川の「文緯」、「諧聲圖」、「古聲譜」、「諧聲律呂三類」、「考聲徵」などであります。此等を以ても漢學者は、皆支那音韻に關心を有つてゐた事が推し測られるとおもふのであります。

文雄の頃までは、「韻鏡」の研究は、縱、誤解や曲説を下して迷路に墮入などしたとはいへ、其研究は「韻鏡」其自體のもので、研究者も、僧侶か或は漢學者かであつて、他の方面の者は無かつたのであります。處が此文雄と時を同じうした我國學四大人の一人である本居宣長が来て來つて、茲に「韻鏡」は勿論でありますが、他の支那音韻の學書をも利用し、應用して、我邦の古典を研究する様になつたのです。此純粹の國語學者の探究に依て、大に我古典を闡明たらしめた事は、我學術界の一大轉機ともいふべきものであります。此は忘れてはならぬ事柄であります。一たび此國

學大人の方針方法が、爾後學界に波及して、愈、益貢獻寄與をなした事實は感銘すべきことであります。本居宣長には、安永四年「字音假字用格」、天明四年「漢字三音考」、寛政十二年「地名字音轉用例」等の直接支那字音關係の著述がある外に、其大著「古事記傳」、其他の著書の所論には皆支那字音の學說を以て證明した名論高説が充實してゐるのであります。一々茲に續述するに及ばぬ事であり、又此本居宣長の學説は、後年東條義門とか、關政方とかいふ人達に依て補訂され、愈、完成せられて、學界に裨益を與へてゐるのであります。此等の事柄は、國語學に關するもので直接「韻鏡」に關係した事でないから、これ亦省略致します。

前に述べました様に、僧文雄に依つて「韻鏡」の本旨本質が明になりましたが、此人に依つてもまだ知らぬ未知の點が存在してゐたのであります。それを明かにしたのが、太田全齋であります。此人は實に「韻鏡」學の大家であつて文化年間に名高い「漢吳音圖」や其他の好著を公にしました。支那音韻學書としては屈指有數のものであります。「漢吳音圖」以外の著述は未刊であつたのですが、去る大正四年に全部が活版本となつて出版されました。「漢吳音圖」は「韻鏡」に本づいて、漢吳音を示したのですが、元來此「韻鏡」には反切門法など煩瑣な説明が附纏うて居たのを、文雄「磨光韻鏡」に於ては、張麟之の序例を全部削去つて、「韻鏡」は本圖其儘で音を得るものである。反切に藉るを要しないと喝破しましたが、それでも、尙、素隱では門法を説いてゐるのです。それを此全齋といふ人が、初めて門法を棄て、圖について音を知るものとしたのが大卓見であります。次に全齋は、音圖の同行同段は共通の音韻を有すべきものと考へたが、我邦に行はれてゐる字音は、同行同段でも、中々共通の部分をも有しないから、従前此處まで看破した者は絶無であつたのです。全齋は我邦の字音で一樣でない音について共通なのを認めるのは、一字に先づ數

多の音があることとして、原音、次音、轉音、省呼、俗音、便習音、訛音などといふ種類を立て、其中の常に呼ばれるのを通音といひ常には用ひられないが理論上有るべきものと認めたものを質音と名付けたのです。此全齋の意見は苦心の上からの創見でありますが、元來言語の學問は歸納的に論述すべきもので、創作すべきものではないといふ見地からいふと、首肯され無いのであります。後年の學者に非難攻撃を受けるのが、此點に在るのです。斯る非難があるにしても、全齋が音圖に朝鮮の字音を用ひて我字音の證明に供したのも、亦一卓見であります。先に文雄は華音即唐音に依つて同様の證明をしたのでありますが、此の元や明の時代の華音を以てするよりも、後の全齋が朝鮮の字音を以て證明してゐる方が遙に勝れた遣方であるとおもふのであります。屢々革命や民族の移動侵入を重ねて、言語音韻の動搖變轉を逞うした支那後代の音よりも、比較的變革、動搖の少い朝鮮音の方が、寧ろ、唐代の音韻圖といはれる「韻鏡」には近接適切してゐるのではなからうかと考へられるのであります。全齋自身は「漢吳音圖」の創見として、六條を卷首に標榜してゐるが、此については一々改めて述べるに及ばぬとおもふので、省略に附しておきます。

全齋について、狩谷棧齋がでて我古典の考證に字音を用ひたり、又前に述べました東條義門が「於乎輕重義」や「男信」で、關政方が「備字例」で支那字音を以て我古典に利用して、先人たる本居宣長の所説を補訂したのなどもありますが、これは他の方面の事蹟でありますから、只これ丈をいつておきます。

文雄や全齋の「韻鏡」研究上の卓見や功績は今申しました如くであります。此人達に次いで、我「韻鏡」學上に見遁す事の出来ない者は、黒川春村であります。此人は文久二年「音韻考證」を著して其中に種々の卓説を述べてゐます。全部二十二卷とか三十卷とかあるといひますが、自分の見たのは只其二卷丈で、他に「緊用鈔」といふものと丈ですが、

此三卷の中には、澤山の名論卓見があります。勿論、部分的研究のものが多くを占めてゐるのですが、中々立派なものです。一々茲に述べる譯にいかぬからこれを省略します。此春村の門人に白井寛蔭といふのがあります。此人も亦一方の雄將で、師匠の「音韻考證」を補成し、又別に「音韻假字用例」といふ書物を、萬延元年に出版してゐますが、これは本居宣長の「字音假字用格」の補訂完成であります。

これまでは江戸時代の話であります。明治維新後になつては、一時開國の氣運につれて泰西の學術の講究が專一となつたがため、暫時、此「韻鏡」學は荒れた有様であつて、只幕末からの學者が此過渡期に居て命脈を繋いでゐたのであります。前に述べました義門や春村と親交を結んで居た岡本保孝が、其一人であります。此人には「況齋叢書」といふものがあつて、二百二十六卷百五十有餘種の著述が所收されてゐます。短篇のものが多いのですが、「韻鏡考」、「磨光韻鏡考」、「漢吳音圖補正」、「音韻答問錄」、「古音攷」、「駁全齋讀例」などの諸篇がありますが、何れも寫本で刊行されてゐないのです。帝國圖書館と靜嘉堂文庫とに善本が所藏されてゐます。此保孝の門人に木村正辭博士があるのです。博士は本領は國文學者で、「萬葉集」研究の第一人者であります。博士は又支那音韻學にも造詣が深かつたので、小學に關する著作も、大分あります。中に「音韻雜考」、「漢吳音圖正誤」等があり、「萬葉集」の三辨證と稱せられる「萬葉集文字辨證」、「萬葉集字音辨證」、「萬葉集訓義辨證」の著があつて、此中に種々支那音韻から「萬葉集」の考證をせられてゐます。誠に斯道の名著であります。又明治三十七八年頃「韻鏡」について金澤の碩學高橋富兄といふ人の論争を當時「帝國文學」誌上に連載して世人を驚かした事もありました。以上諸氏は何れも江戸時代からの學者であるといつてよい方です。眞に明治以後の「韻鏡」學者としては、滿田新造、大矢透、大島正健の三博士があります。滿

田博士は、「國學院雜誌」や「東洋學報」などの誌上に有益な論文を發表され、大正四年には「支那音韻斷」を刊行して其研究の要約を公にせられましたが、此書の内容は極めて豊富なもので、特に音韻の時を逐うて轉變した跡を明らかにめられたのは、實に其卓見であります。大矢博士は、當代に於ける斯學の巨擘といふべき人で、「國學院雜誌」を初め、諸誌の上に論文を公にせられ、又「韻鏡考」、「同附錄隋唐音圖」など直接「韻鏡」に關係した大著や、間接のものに「假名遣及假名字體沿革史料」、「假名源流考」、「周代古音考」、「同韻徵」等の名著があります。此人の名論卓説は世に周知の事實でもあり、耳目に新なる所でもありますから、茲に改めて申しあげるに及ばないから略しておきます。大島博士は、また一代の學者で、「國學院雜誌」、「帝國文學」などに諸説を發表せられ、「音韻漫錄」、「支那古韻考」、「韻鏡音韻考」、「韻切要略」、「改訂韻鏡」、「漢字聲符考」(後に漢字音韻考と改稱)、「韻鏡と唐韻廣韻」、「韻鏡新解」、「支那古韻史」、「漢音吳音の研究」等の諸著を世に出されました。殊に「支那古韻史」は、一大雄篇で不朽の著述と唱へられてゐるものです。本書については世人の記憶に新なるもので、今更詳述するを要しないのであります。尙三博士に次いで、岡井慎吾博士があつて、斯道に精通せられてゐるのです。自分も此等の諸先輩の驥尾に附して今尙研究をしてゐるであります。

此迄述べましたのは我邦の研究でありますが、元來「韻鏡」といふ書物は、夙に支那では散逸して仕舞つてゐたので、彼邦では、從來其研究が無かつたのであります。獨、我日本にのみ成し遂げられてゐたのです。處が近年支那で小學音韻學の研究が勃興して來て、我永祿板や寛永板の「韻鏡」の影印本や覆刻本が刊行され、彼邦の學者の研究が漸く現はれて來たのです。殊に最近煥煌石室から唐代の「音圖」が發掘された相であります。此「音圖」がやがて我邦に傳來す

るでせうから、此傳來があつた曉には、「韻鏡」の本質が明かになり大に發明する所があるでせうと鶴首して待つてゐるのです。

以上申しました所で、「韻鏡」研究の大略がおわかりになつたとおもひます。「韻鏡」が支那で刊行の際、已に出板者の張麟之が序例を添附して、其序文の中に反切の用に供すべきものだといつたのが、抑ゝ誤解の源で、後世の學者がこれに誤まされ、且、本邦に傳來して、其發見があつてから後には、又々人名撰定、名乗反切などの曲説を生じて、益々其誤解を重ねたが、河野通清や僧文雄や太田全齋に依て、順次、其誤解曲説が一扫されて、「韻鏡」の本義本質がわかつたのであります。「韻鏡」を研究するには、其序文は全部度外視して、只本圖の音圖を以て、古音の研究をなすべきであります。又決して古人先哲の註釋なども氣にかけてはならぬのであります。つまり音圖のみを標準として、他を全然顧みない様にする事であります。丁度今回此「韻鏡諸本展觀」に附隨して、特別展觀の「萬葉集」が出陳されてゐますが、此「萬葉集」の刊本も、初めは無訓本であつたが、後に附訓本が出て、又種々の註釋本が出来たのであります。それで後世の研究者には、大變便益を得る様になつたのです。然し、又一方よりいへば、有訓本や諸種の註釋書が出来たがために、却つて、後世、誤讀や誤解や曲説が起つて、果ては文字の改竄などを無暗矢鱈に行つたりして、愈々益々五里霧中に彷徨せしめる有様となつて仕舞つたのであります。「萬葉集」は、元來、漢字即所謂萬葉假名で記したものであるのだから、後に假名で附訓したのが、其誤讀や誤解を來したものととなり、其上に此等の誤讀や誤解のものに依て、後の學者が註釋を加へたから愈々益々迷路に陥つて仕舞つた譯であります。それで眞正の「萬葉集」研究には、附訓を取去り、註釋を顧みずして、全部漢字即所謂萬葉假名文の本文に依て細心熟慮して、徐に研究を遂げ

なければ眞髓を悟得出来ないものであります。近時此風潮傾向が専ら學徒の間に行渡つて認識された様であります。自分が青年時代に或英語の先生が、沙翁の戯曲を教へられた際に、沙翁の戯曲は、是迄澤山の研究者が種々の註釋を施したがために、却つて眞相がわからないのである。それで沙翁戯曲の本質本體は、此等の註釋を全く除去した其本文を讀んで、靜かに考慮すべきである。丁度寺院に安置してある諸々の本尊の佛像が、其燈火の煤煙で、くすぶつて黒くなつてゐるが、此煤煙を悉く拂ひ去つて、茲に初めて本來の金色燦爛たる本尊を拜する事が出来る如きものであります。此等の話と同じ様に、「韻鏡」の研究にもまた大に注意留心を要するのであります。これで自分の卑見の概要は述べ終つたのであります。尙注意すべき事項や、必要なものを言ひ落した所がありませうが、其等は本日皆様にお上げ申しました「展觀目錄」に大抵の典籍は載つてゐますし、又未だ不充分で至つて未熟であります。自分の撰述の「韻鏡研究年表」が出陳中に御座りますから、此二つを御參考に御覽下さいましたならば、大體おわかりになるとおもひます。誠に甚だつまらぬ長い話を致しまして御靜聽を煩しました。これで御免を蒙ります。(拍手)

(本篇は去十月二十八日、本學圖書館主催の「韻鏡諸本展觀會」に於ける龜田教授の御講演を要領筆記したものである。編輯子記)

韻鏡諸本目錄編纂に就いて

大谷大學圖書館

一、本書目は直接韻鏡に關係ある而も其主要なる著書のみを收載し新聞雜誌等に掲載せられたる論文は全く之を除外省略して收載せず。

二、寫本の成稿時代不明のものは著者若しくは其内容の記事より推定して適宜の所に配列したり。

三、收載の著書は其成稿刊行の年代順に配列し其重板、異板、改題若しくは改訂は凡て之を其初刊本若しくは類本の條下に註記したり。

四、本來韻鏡とは何等關係無き著書なるも後日其韻鏡研究に多大の影響を及ぼしたるものは多少之を收載したり

五、本邦の字音假名遣及漢字音韻に關係せる著書にして韻鏡に連關せる所論の見えたるものもあるも此等は其著述の本旨外に屬するものなれば悉く之を除外省略して收載せず。

六、韻鏡は夙に支那に於て逸書に屬す故に本書目收載のものは専、本邦刊行に係る者たるは固より其處なり然れども其源泉と認むべき支那韻學書若くは最近彼邦刊行の複製影印本の類は之を收載したり。

七、本邦刊行の韻鏡書目極めて多く尙幾多の遺漏あるは明かなり其等は今後漸次其獲得を俟ちて補足し完璧を期せんとす然れども主要著名のものは殆んど網羅せりと信ず。

八、尙ほ本書目は昭和十四年十月廿八・廿九兩日本館秋季展覽會として韻鏡諸本展觀開催に當り特に本館の編纂せる書目を更に増補訂正せるものなることを茲に附記す。

韻鏡諸本目錄

大谷大學圖書館編

一 唐寫本唐韻

光緒三十四年(明治四十一年)蔣斧刊 上海國粹學報館印行

大一冊

二 七音略

(六書略合刻)通志略所收原刊本(明板、又元至治本覆刻、享保十六年孟冬日本京都河南四郎右衛門山本平左衛門中村次郎兵衛ノ合編ニテ翻刻セリ)

大二冊

三 七音略

(六書略合刻) 民國二十四年影印本

中一冊

四 韻鏡 (寫)

元德三年正月成 玄惠書寫

大一冊

五 指微韻鑑略抄 (寫)

至德四年八月成 永祿四年八月寫

大一冊

六 指微韻鏡私略

貴重圖書刊行會本

中一冊 谷大本 別冊

七 韻鏡序解 (寫) 卷子本

奥書ニ應永廿年戊戌九月十日 悉曇末資左寺聖清トアリ

一軸 谷大本 外乙一

新田ノ韻鏡舊註(大谷學報第十一卷第二號所載) 參看ヲ請フ
韻鏡古註ト道惠抄(立命館文學第三卷第七號所載)

八 指微韻鏡抄

應永二十五年以前成(道惠抄)刊記承應三年曆正月吉旦岡本喜兵衛尉新刊于容膝堂本書ハ韻鏡序解ノ刊本ナリ

大五冊谷大本合一冊外大元六

九 指微韻鑑

原本ハ國寶ニシテ 粘葉綴冊子本ナリ

嘉吉本景刊(古典保存會本)昭和十二年八月刊

中一冊

韻鏡諸本目錄

一一七

二 韻鏡看拔集

(足利時代成)

大二冊

本書ハ完本ニテ叡山東塔南谷淨教房舊藏、其ノ成功並ニ書寫ノ年月不明ナルモ其ノ内容ノ記事並ニ他ノ類書ニ見エタル所ヨリ察スルニ足利初期ノモノタルハ明確ナリ、東京帝大圖書館舊藏寛永元年本、同國語學研究室舊藏寛永十一年本ハ其ノ内容同一ニシテ共ニ抄録本ナリシガ大正十二年ノ饑災ニテ焼失セリ

二 韻鏡

永祿七年刊本 船橋家舊藏本

大一冊

無跋無刊記本アリ(龍谷大學所藏)

三 韻鏡

古逸叢書覆刻本

大一冊

三 韻鏡

中華民國十八年謄寫版本

大一冊

四 韻鏡

元和板カ刊記ナシ

大一冊

五 韻鏡切要鈔

一本ニ慶長戊申中春良日 下洛潤轍書院新葉トセル木活字版アリ、本書ハ其ノ整板後刷ナリ

大一冊

六 韻鏡開隘

六卷

寛永丁卯(四年) 法橋宥朔識語アリ(正保四年及萬治二年ノ後刊本アリ)

大六冊 谷大本三冊外大三四

於一條室町燒屋堂踐新焉。江州金森善立寺ノ印アリ

七 韻鏡

寛永五年刊 刊記ニ皆寛永五年戊辰孟夏吉辰 十兵衛開板

小一冊 谷大本 外大圖宛

八 韻鏡

寛永十八年八月刊 二條通鶴屋町 田原仁左衛門梓行

大一冊 谷大本 外大圖宛

九 韻鏡

佐藤仁之助影刊本 昭和四年九月刊(昭和十年五月再版)

中一冊

三 韻鏡

中華民國二十三年影印本

小一冊

本書ハ東京松雲堂ノ影印本ヲ中華民國二十三年ニ北京大學ニテ再影印セシモノナリ

三 韻鏡

寛永二十一年刊 刊記ニ皆寛永廿一甲申三月日 利兵衛開板

小一冊 谷大本 外小圖宛

三 韻鏡

正保乙酉仲夏吉日

小一冊 谷大本 外大圖宛

韻鏡

正保丁亥六月吉祥日

小一册 谷大本 外小五七

西韻鏡

慶安元年仲秋刊

小一册 谷大本 外小 三六

二五
韻
鏡

慶安元年刊（慶安元年異板本）
三條通菱屋町 林甚右衛門

小
一
册

天韻鏡

明曆二丙申初秋吉祥日

大一册

韻鏡遮中鈔

萬治三年庚子臘月吉辰開板

大合一册

大韻鏡遮中鈔

寛文三年六月刊 長尾半兵衛開板

大台一册 谷大本 外大三〇六

韻鏡遮中鈔 附諺解追加

貞享四年刊

大二册

三 遮中鈔刊誤

前書序文丈ノ書入 一齋(佐藤?)刊

大一册

三 大字韻鏡
(後刷二八改)

(後刷ニハ改字韻鏡ト題シ刊行年月無ク、書林古川參郎兵衛ト記スモノアリ)

寛文二年十一月刊 高橋清兵衛

大一冊 谷大本 外大二冊

三韻鏡

寬文四年三月刊 竹庵玄隆著 大和田九左衛門開板

大一册 谷大本 外大三三三

三
韻鏡集解切鈔

寛文八戊申歲仲秋 江戸仲野孫三郎板行

大一冊 谷大本 外大三冊

韻鏡見妖解

井上松齋撰 寛文九年仲春日 村上勘兵衛刊行

大三册 谷大本 外大三五二

三五
韻鏡秘事大抄

小龜益英作 寛文九年九月刊 室町小龜三左衛門板行

小合一册谷大本二册外小 三三

韻鏡頓悟集

延寶七年七月ノ後刷改題本アリ

寛文十年二月刊 牧野重長著 鈴木太兵衛刊

大一册

三 韻鏡診解

寛文十年七月刊(延寶七年七月本アリ) 小龜三左衛門開板

中一冊

二 經史正音切韻指南

寛文十年刊

大一冊

一 韻鏡略解(寫)

寛文十二年 荒木松隣自序アリ

大一冊

四 韻鏡指要 上・中・下卷

寛文十三年正月刊 隆向寺周海著

小合一冊

四 韻鏡

延寶三年九月刊

中一冊

三 正韻鏡診解大成 一卷

改 津高益典作 延寶七年七月刊 洛下書林八尾清兵衛板行

中五冊 谷大本 外大四三

正 改 韻鏡祕事大成 二一五卷

寛文九年九月及寛文十年七月本ノ合刊ナリ

小一冊

四 韻鏡

延寶七年七月刊 松聲軒益典津高實闇改正 洛下書林八尾清兵衛板

小一冊

四 韻鑑傳受指南(寫)

奥書 于時延寶辛酉秋七月十八鳥投于筆亭子南軒矣 笠郷惠光 俗廿六 臘十七夏七

大一冊 谷大本 外大二三

四 校正韻鏡

天和二年正月刊 川勝又兵衛尉開板

大一冊 谷大本 外大三三

四 正字韻鏡

竹下良繩著 貞享二年八月刊

大二冊

四 韻鏡祕訣袖中鈔 五卷

貞享二年刊 刊記貞享第二乙亥歲孟夏穀旦 小野善左衛門・太田平左衛門・濱口彌兵衛繡梓

小五冊

四 韻鏡求源鈔

貞享二年刊 刊記貞享二乙丑年鴻賓吉旦 洛陽住西村重慶 丸屋源兵衛開板

大五冊

四 音韻指掌圖

貞享三年洛陽、竹下明繩ノ序文アリテ、表紙見返シ及ビ卷末ニ夫々梅林軒新鐫、竹下原陸、稻津宗海印行之ナドトアリ。又裏表紙見返シノ書入レニ元祿二年五月十五日授竹下氏之病室記 韻鏡反切音聲之奥旨焉 釋氏光春沙門用之トアリ(元祿十年三月及享保六年五月ノ後刷本アリ)

大一冊 谷大本 外大元五

- 五 合類韻鏡及問答鈔 貞享四年八月朔湯淺重慶自序アリ、大阪心齋橋筋淡路町角安井嘉兵衛新刊 大二冊
- 五 司馬溫公切韻指掌圖 元祿元年刊 刊記元祿元戊辰歲霜月吉祥且 書林 坂口勘兵衛・久保田權右衛門板行 中一冊
- 五 冠註韻鏡易解 沙門盛典著 元祿四年刊 刊記元祿四年九月上旬 書林 山口茂兵衛・岡村喜兵衛開板 大四冊 谷大本 長保五
- 五 切韻指掌圖 元祿癸酉夏四月望日、洛陽、加藤宗恒玄三ノ序文アリ卷末ニ落丁補寫アリ、坂口勘兵衛板行ト書入レアリ(元祿元年刊司馬溫公切韻指掌圖ノ後刷ナリ) 中一冊 谷大本 外大五六四
- 五 韻鏡袖中鈔人名反切續編愚蒙記 元祿八年刊 刊記ニ元祿第八乙亥南呂穀旦 洛陽書肆鐵屋・休里開板 中二冊
- 五 韻鏡序列及唐本韻鏡 太田富任校訂 元祿五年刊 刊記ニ元祿五壬申年仲冬吉辰吸月堂清水春流 大二冊
- 五 廣韻字母集 太田富任著 元祿壬申五年十一月序アリ 大一冊
- 五 韻鏡字彙 本書ハ韻鏡序列及唐本韻鏡ト共ニ寛文十一年本ノ後刷ナリ此寛文本ハ外題ハ韻鏡指南抄、内題ハ廣韻指南抄及廣韻反切指南鈔トアリテ前書ト合刻三冊本ナリ 太田嘉方著 刊行年月未詳 大一冊 谷大本 外大三四四
- 五 訂正韻鏡 元祿六年正月刊 寺町通二條下町 中村五兵衛開板 大一冊
- 五 校正韻鏡 元祿六年正月刊 林源兵衛開版 大一冊
- 五 改正韻鏡 以上三本ハ改題セルト其刊行書肆ヲ異ニセルノミニテ全ク同板ナリ 元祿六年刊 林源兵衛開版 大一冊
- 五 校正韻鏡 元祿九年正月刊 五條橋通扇屋町 川勝五郎右衛門板 大一冊 谷大本 外大三〇八
- 五 五百字增補韻鏡 元祿十年十月刊 弘湍園開改正 大一冊

三 追加韻鏡易解 上・下卷

元祿十二年正月刊 沙門盛典著 山口茂兵衛板

大台一册

四 歸元韻鏡

卷三末識語ノ次ニ元祿十丁丑曆中秋日、備之中州倉敷住 九月下旬 岡氏玉摩識トアリ、卷四末刊記ニ元祿十二歲卯曆三 月下旬 離陽書林上村平左右門 大阪心齋橋筋上人町鷹金屋 庄兵衛刊行

大四册 谷大本 外大三七九

五 經史正音切韻指南

元祿十四年正月刊 弘湊園開重刊

大一册

六 韻鏡詳解評林

元祿十五年九月刊 二條通御幸町西入町 山岡四郎兵衛開板

大五册

七 韻鏡諸鈔大成 七卷

寶永二年刊本 馬場信武著

大九册 谷大本五册外大三〇五

八 諸說辨斷韻鏡袖中祕傳鈔

卷十末刊記ニ正徳第五乙未仲夏穀旦 離下文堂、山崎庄兵衛、河南四郎右衛門

中十一册 谷大本外大三〇五

九 韻鏡祕傳集 (寫)

正徳四年成 官明酌

中一册

十 新增韻鏡易解大全

沙門盛典再選 享保三年刊 楊文軒重雕

大五册 谷大本 外大三〇九

十一 聲音對

靈苗天座著 享保五年刊本 洛陽書肆 山本常長梓行

大一册

十二 改正韻鏡

(内題 音韻指掌圖)竹下良繩著 享保六年刊 大阪心齋橋安 堂寺町 大野木市兵衛

大一册

十三 韻鏡講義 (寫)

細田要齋自筆本 干享保六辛丑仲夏吉日奎月院ニテ寫之 持 主愚良

中一册 谷大本 外丙 四

十四 十二反例圖并假名反 (寫)

命宣焉之扣 天明七末年十二月調之佐草藏書

中一册 谷大本 外大三四四

十五 韻鑑古義標註 二卷

沙門徽龍 享保十一年十一月刊本

大二册 谷大本 外大八五

十六 備考韻鏡

享保十二年刊岡島隆紀ノ序文アリ 書林 野田彌兵衛、野田 太兵衛

大一册

卷末ニ安永八〇歲九月天求之

湖北長光寺卜書入レアリ

七 九弄反紐相傳和解 二卷

東嶺慶田藏ノ印アリ

沙門盛典著 享保十五年三月刊 寛保元年重校定本 山口茂兵衛(寄)彫刻

大二册

七 十二反切鏡映鈔 (寫)

奥書ニ享保十五箇舎庚戌至後九日編輯了 虛隱慈春老人自出之

大一册 谷大本 外大三八

六 參訂切韻指掌圖

享保十七年刊

大一册

六 韻圖解

河野通清 享保十八癸丑五月吉日 京都書舖 植村藤右衛門 永田調兵衛 同梓

大二册

六 韻鏡調

河合元 享保年中刊

大一册

六 倭語連聲集

野州佐野大聖院盛典述 刊記ニ元文二年丁巳正月穀旦 高麗橋壺丁目 淺野彌兵衛 京寺町五條上ル町 中野宗左衛門 元文三年三月刊 洛陽書林 秋田屋平左衛門・文台屋次郎兵衛同梓

大一册 谷大本 外大三三

六 韻鑑古義標註補遺

元文三年三月刊 洛陽書林 秋田屋平左衛門・文台屋次郎兵衛同梓

大一册

六 校正韻鏡

(別本ニ大阪書林伊勢講中某甲等阿佐井宗仲校トセルモノアリ大阪府立圖書館所藏)

大一册

六 澁窩先生改點韻鑑

河野通清 寛保第三癸亥載三月元旦 秋田屋平左衛門・文台屋次郎兵衛合刻

大一册

六 磨光韻鏡 二卷

釋文雄 延享元年八月刊 皇都書肆 二條通寺町西入町 金屋三郎兵衛梓行トアリ又一本ニ皇都書肆 二條通御幸町西入町 山本長兵衛梓行トアリ又一本ニ寺町通御池上ル町八幡屋四郎兵衛梓行トセルアリ一見後刷ナルコト知ラル天明七年五月ノ後刷本モアリ

大二册 谷大本 外大三三

六 名乘韻鏡指南抄 (寫)

卷初ニ 享保十六年正月ノ自序文

洛下庸醫 信更生纂述 延享二丑夏望日 永貞齋敷東莞謹識ノ跋文

大一册 谷大本 長保蓋

六 九弄辯

釋文雄 寛延三年五月刊 書肆 京都二條通寺町西入町 金屋三郎兵衛・大阪心齋橋筋久寶寺町 丹波屋理兵衛刊行

大一册

六 三音正譌 二卷

(天明八年戊申十一月購版本アリ)

釋文雄 寶曆二年十一月刊 天明八年十一月摺本 浪華書林 心齋橋順慶町 柏原屋清右衛門

大二册 谷大本 外大三三

六 韻學發蒙

文雄序 釋了圓義述 寶曆七年四月刊 京師書舖 寺町押小路下ル町 金屋三郎兵衛 四條通寺町西へ入町 著屋勘兵衛

七 韻鏡序例并二六啓明

原陰齋 寶曆八年十月刊 浪速書林 南本町壹丁目 村井喜太郎 高麗橋壹丁目 淺野彌兵衛合梓

八 韻學口訣

池田柳絮著 寶曆十一年正月刊 浪華書林 順慶町壹丁目筋 用原屋平兵衛・鹽町壹丁目 山城屋忠次郎壽梓

九 音例

安齋靜齋先生口占 門人浪華王順之字仲 淡路眞恭溫卿同錄 刊記ニ寶曆十二壬午歲九月 平安書肆 林宗兵衛梓

十 韻鏡藤氏傳

富森一齋 安永五年正月刊 書林 二條御幸町西入町 山本長兵衛・三條烏丸西入町 八幡屋勘三郎彫刻

十一 韻鏡諸部考證 (寫)

奥書ニ維時内申 安永五歲仲皆於南筑梅林神利繕寫焉信之岐祖陳人 如賀 澁窩著述

十二 卷懷韻鏡

刊行年月未詳(コノ頃ノモノナリ)

十三 觀象齋韻鑑

刊行未詳(安永頃ナルハ明ナリ)

十四 磨光韻鏡後篇

安永九年二月刊 天明八年十一月撰本 浪華書林 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛

十五 磨光韻鏡餘論

文化四年二月刊(文化二年七月本モアリ) 皇都京極通松原上ル 菊屋喜兵衛・江都日本橋三丁目 柏屋金兵衛・浪華心齋橋筋 順慶町 柏屋清右衛門

十六 大全磨光韻鏡

天明八年十一月刊 浪華書林 心齋橋順慶町 柏原屋清右衛門(第一卷翻切門法ノ終リニハ延享紀元甲子秋八月原刻 天明七年丁未夏五月再刻トアリ)

十七 磨光韻鏡

三浦道齋校正 安政四年五月刊 浪華書肆 積玉園・文榮堂 合梓

十八 韻學提要 (寫)

中一册 谷大本 外大四〇天

一〇三 韻鏡反例拾要 (寫)

一〇四 韻鏡表傳授切紙 (寫)

一〇五 四聲開合初心鈔

一〇六 韻學一貫 (寫)

一〇七 韻鏡八門 (寫)

一〇七 字音假字要略

一〇八 韻鏡諸例評 (寫)

一〇九 永福釋子養謙謹誌トアリ

一一〇 韻鏡經緯

一一一 解經祕藏要略

一一二 解經祕藏

一一三 韻鏡反切名乘即鑑

一一三 韻鏡批糠 (寫)

一二四 韻鑑傳授試例裏表切紙

一二五 韻學筌蹄

中一冊 谷大本 外大三〇七

中一冊 谷大本 外大三九

大一冊 谷大本 外大三四

中一冊 谷大本 外大蓋六

中合一冊 谷大本 外大蓋三

中一冊 谷大本 長保三

大一冊 谷大本 外大三七六

大三冊 谷大本 外大三七六

小一冊 谷大本 外大三七六

中一冊 谷大本 外大三七六

大一冊 谷大本 外大三七六

文雄監定 近藤篤撰 寛政六年三月刊 宮田六左衛門影刻

川上勝好拜書 江戸小石川白山前町 雁屋久兵衛版

592
二六

韻學速成

(韻鏡調二冊下合刻) 河合元著 刊記二(上卷末)寬政七卯

大三冊 谷

二七 音韻斷

泰山齋隱 寬政十一年三月刊 皇都書肆 東六條魚棚東洞院
西入 菊屋源兵衛發行

大三冊

二八 切韻定法圖

大詮法師著 文化九年七月刊 潛龍堂藏板

大一冊

二九 漢吳音圖及圖說

太田方 文化十二年五月刊

大三冊

三〇 漢吳音圖外六部

濱野知三郎校訂 大正四年一月刊 東京六合館

中六冊

三一 掌中韻口輪

俊國上人 文化十三年刊 越前府中 齋藤善右衛門・浪華書肆
鳥飼市右衛門・皇都書肆 今并喜兵衛

一鋪

三二 音韻

若槻敬 文化十四年三月刊 書林 京師 葛西市郎兵衛・江戶 野田七兵衛・大阪 柳原喜兵衛

橫一冊

三三 華音韻鏡

文化刊本 書鋪 江戶 鶴屋喜右衛門・京都出雲寺文治郎・大阪秋田屋本右衛門・雲州新屋安右衛門 後明治年間ニ

中一冊

三四 韻鏡筆記

藤陰先生講辯 門人小野兌筆譯 傳來ノ章ニ 宋嘉泰三年張麟之初刻之 至今文政二年凡六百二十年トアリ

中一冊 谷

三五 韻鏡記聞(寫)

表紙見返シニ文政辛巳春天放上人講説トアリ

中一冊 谷

三六 韻學學要

竺稱雲 文政九年六月刊 越中三日市 让德法寺藏 書林越中富山 紅粉屋傳兵衛

大一冊

三七 磨光韻鏡口授記

(外題韻鏡口授秘傳書)(寫)與書ニ韻學僧京師三條了速寺無相文雄上人 第七傳 兼本居學 鶴峯戊申于時文政第九歲次丙戌三月下旬比浪華鶴峯翁於國女講談之節傳寫之者也沙門龍昇皆天保第十有五載龍集甲辰中和既望自善良精舍龍昇師再傳寫之者也北野山德滿寺乞士良潤

小一冊 谷

三八 韻鏡假名遣大事(寫)

與書ニ文政六癸未秋八月於金澤末光專寺以本龍寺達悟之覺書寫之片田豐倫釋集註行年六十四歲
文政十二己丑年余遊湖西慈敬寺數月矣 偶搜書架得此書因卒寫之沙門空觀

中一冊 谷

594 一四 韻鏡研究年表 (寫)

明治三十八年五月起稿 龜田次郎

中一冊

一四 韻鏡音韻考

大島正健 明治四十五年六月刊 大正二年再版本アリ 東京啓成社

中一冊 谷大本 外洋三六七 外洋四四七

一四 翻切要略

大島正健 明治四十五年六月刊 東京啓成社

中一冊

一五 改訂韻鏡

大島正健 明治四十五年七月刊 東京啓成社

中一冊

一五 改訂韻鏡

大島正健 明治四十五年七月初版・昭和二年十二月再版 東京 耶馬台書房

中一冊 谷大本 外洋三五三

一五 漢字聲符考

大島正健 大正二年六月刊 東京啓成社

中一冊

一五 漢字音韻考

(漢字聲符考改題本)

大島正健 昭和五年八月刊 東京松雲堂

中一冊 谷大本 外洋五七六

一五 支那音韻斷

滿田新造 大正四年刊

中一冊

一五 韻鏡考

大矢透 大正十三年十二月刊

大一冊 谷大本 外洋三四二

一五 韻鏡卜唐韻廣韻

大島正健 大正十五年十月刊 東京松雲堂

中一冊

一五 韻鏡卜唐韻廣韻

大島正健 昭和五年一月刊(再版) 東京松雲堂

中一冊 谷大本 外洋五三九

一五 韻鏡新解

大島正健 大正十五年十二月刊 東京松雲堂

中二冊

一五 韻鏡新解

大島正健 大正十五年十二月初版 昭和七年六月再版 東京松雲堂

中一冊 谷大本 外洋八五九

一五 支那古韻史

大島正健 昭和四年十月刊 東京富山房

中一冊 谷大本 外洋八六〇

一五 韻鏡研究法大意

佐藤仁之助 昭和五年三月刊 東京松雲堂

中一冊 谷大本 外洋五三七

一五 漢音吳音の研究

大島正健 昭和六年十月刊 東京第一書房

中一冊 谷大本 外洋書四

一六 附錄 隋唐音圖

大矢透 昭和七年八月刊 東京大村書店

大一冊 谷大本 外洋書四

一五 日本漢字學史

岡井慎吾 昭和九年九月刊

中一冊 谷大本 外洋書二八

一六 日本漢字學史

岡井慎吾 昭和十年二月增補再版

中一冊

○附

録

萬葉集ノ活字印本ハ無訓本、附訓本及土佐本ノ三本デアル、今春計ラズモ無訓本十九冊(卷一六缺)ヲ本館藏書中ニ加ヘ珍シク本館ニ三本揃ツタノデ、此處ニ余白ヲ藉リテ記ス事ニシタ。

一、萬葉集

活字版 無訓本

十九冊卷十六缺

大谷大學圖書館藏

此ノ無訓本ガ萬葉印本ノ嚆矢デアル、冷泉家本流ノ卷四五六ノ三冊ニ神宮文庫本ノ他ノ十七冊ヲ書寫シテ併セテ一部トシタト稱セラレル細井貞雄舊藏本ヲ寫シタ林道春ノ校本ヲ基ニシテ植字印行シタモノデ刊行年月未詳ナルモ版式上慶長後半期ノ印行デアラウ。

二、萬葉集

活字版 附訓本

二十冊完本

大谷大學圖書館藏

無訓本ヲ底本トシテ、寂印成俊本ノ一傳本ヲ以テ訂補ヲ施シ且ツ奥書ヲモ加ヘテ印行シタノガ此ノ附訓本デアル、刊行年月未詳ナルモ慶長元和中ノ印行デアアラウ。

三、古萬葉集

土佐本

二十冊完本

大谷大學圖書館藏

世ニ土佐本ト稱セラル、モノデ、土佐ノ學者谷眞潮ガ白文ヲ以テ萬葉ヲ訓ミ解クベキ事ヲ教ヘ後其ノ門人今村榮ノ勸メニヨリ享和三年土佐國人横田美水ノ刊行シタモノデアル。